「牧口一二が体験した学校、授業」の話

今回はこれまでで一番多い 38 人が参加、つまり“学びをひろげる わたしと 37 人の会”になりました。テレビの取材も入りました。

牧口一二さんは、NHK・E テレの人気番組「バリバラ」の前身である「きらっといきる」に 10 年間レギュラー出演をしたり、障害者問題の情報誌「そよ風のように街に出よう」の編集や、おそらく 2,000 校を超える学校を訪ねた出前授業など、多方面に活躍してこられたので、「牧口さんに会いたい」「話を聞きたい」と足を運ばれたのだろうと思います。

またたく間に聞く者を「牧口 world」に引き込み、あっという間の 90 分のお話でした。例えばこんな具合です—

▼小学校入学期に母に負ぶわれて身体検査に行ったが、戦争中で「空襲の時に危険だから」と断られた。帰り道、ぼくを負ぶって泣きながら歩く母のうなじをなぜか覚えていて、今も時々思い出す。

▼敗戦後 3 年遅れの 1 年生として、また母に負ぶわれて学校に行くと、先生が「お待たせしました」と迎えてくれた。

▼父がうれしそうに目の前で風呂敷を開くと、黒光りの松葉づえがあった。「これがお前の足や」と。初めて一人で学校に行けた日、早く着きすぎて友だちは誰も教室にいない。職員室で先生に見せびらかした。担任の女先生が抱きしめてくれて背中をトントン、ぼくは先生のお尻をトントン、柔らかなお尻だった。

▼体育の時間は、ほとんど嫌な思い出がない。ぼくはひょっとしたら体育の時間に育てられた人間かもしれない。

▼中学校からボチボチ進路を考え始めた。「イッちゃんは早ヨ手に職をつけなあかんな」と言われることも多かったので、工芸高校へ進もうと考えた。そんな時中学の美術の先生が「きみのような人ほど、ゆっくり考えた方がいい。世の中にはいろんな仕事があって、人間に関わりのない仕事はない」といわれた。

▼1 年間で 54 社の就職試験を受けたけど、全部ダメだった。友だちが共同のデザイン会社を設立したと連絡をくれたので駆けつけたとき、「いっしょにやろう」と誘ってくれた。仲間がいなかったらできなかった・・・、と、まあこんな具合です。

牧口さんの人生が肩肘の力を抜いた、柔らかな言葉で語られます。耳も心も心地よくふるわせながら、私たちのからだに染み込んでいきます。「障害者運動との出会いは必然だった」という言葉は、この自然さを意味しているのかもしれません。

ところで（話をいきなり広げますが)、世界は新自由主義経済と金融資本主義が蔓延し、学校教育にもマーケットの原理が侵食して、ますます能力主義、競争主義、評価主義が広がっています。いわば「共に学び、共に育ち、共に生きた」牧口さんの人生・牧口 world への逆流が、世界を覆っているかのようにも映ります。

日本でも戦後積み上げられてきた安全で豊かな社会という信頼が急激に崩れて、貧困や格差が進行しています。アメリカ大統領選挙は、世界が予想以上のスピードで崩壊に向かっていることを実感させました。そんな中、むしろ「共に生きる」生き方がこれから求められるようになるのではないかと、私は考えています。それは決して理想に向かって「共生社会」を目指す能動的な行動とはいえませんが、人間が生き延びるための本能が向かわせるのではと思うのです。

世界の状況がタイトになればなるほど、「担任の女先生が抱きしめてくれて背中をトントン、ぼくは先生のお尻をトントン、柔らかなお尻だった」という牧口さんの柔らかでしたたかな「共生」の思想が、私たちに数限りない示唆を与えてくれるにちがいありません。

学びをひろげる
わたしと○人の会

今回の“学びをひろげる わたしと〇人の会”は、牧口一二さんともう一人の主役がありました。

ヒロキ オウガさんは、大阪市立デザイン教育研究所に在学中で、まだ職業の芸術家・画家にはなっていないようなので、いまは「絵描きさん」と私は勝手に呼んでいます。

研究会が始まる前から、正面の牧口さんと堀智晴さんの間に座って黙々とはがき用紙にマジックペンを走らせていました。1 枚目は、牧口さんだったか堀さんだったか、どちらかの顔を描いて手渡しました。喜色満面の表情で堀さんがはがきをみんなに見せます。感嘆の声が上がります。オウガさんはまわりの声を気に留める風もなく、あるいは無関心を装っているのかもしれません、次の 1 枚を取り出してまた黙々とペンを走らせます。

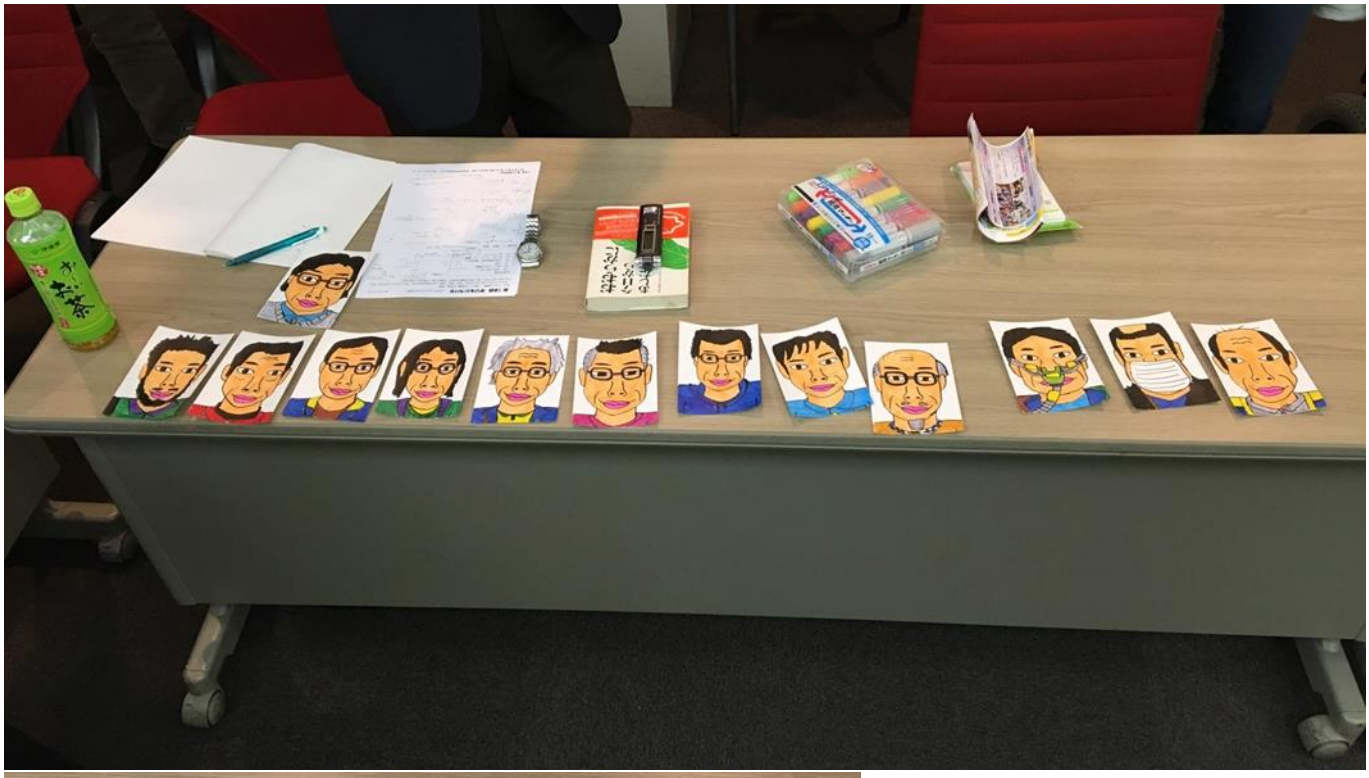
会議がはじまって、牧口さんの講演が続く間も、集中して描き続けています。ひょっとしたらオウガ流ハイパー集中力で、同時に牧口さんの話にも耳を傾けているのかもしれません。1 枚、また 1 枚と用紙を取り出し、出来上がった絵は机の前に並べられて行きます。私がフッと目を上げると、オウガさんの視線と出くわしました。何度もこちらを見るオウガさんと視線がつながります。「おっ、描いてくれてる！」と思うとうれしくなってきます。

きっと参加者のだれもが、会議に集中しながらも、内心オウガさんの視線を期待し、どんな絵になるかと一喜一憂していたのではなかったでしょうか。休憩時間にはあちこちで手渡された絵を観ながら歓声が上がりました。

後半の意見交流の間もオウガさんは描き続けました。描きたい顔、興味魅かれる表情があって取捨選択するのでしょうか？「この人は場を仕切りそうやから、先に描いとこか」（？）なんて、誰から描くのが順当かという利害にまつわる判断があるのでしょうか？「みんな期待してくれてるみたいやから、終わるまでに何とか全員描かれへんやろか」と努力してくれていたように私には見えたりしたのですが。

私の娘は、オウガさんの目が何度も向いてきたので「描いてくれてる！」と胸ときめかせていたのに、結局斜め前の人の絵であったと悔しさをにじませていました。

描いてもらった私ともう一人の娘の 2 枚の絵を見比べながら、「目と鼻の描き方がいっしょやね。動物でもこんな目と鼻を描いてるからオウガ流なんやろね」と、話しました。と、そのとき「あれ、他の人の目と鼻とは違ってる」と声をあげました。「ひょっとして、親子やから同じ目と鼻の形になったんとちがうの。でも、私らが親子かどうかは知らんはずやから、やっぱりオウガさんは二人の目と鼻を同じ形に見たということとちゃうやろか！鋭い観察眼で！」、大盛り上がりの話題になりました。

私たちだけではなく誰もが、オウガさんとのやり取りや立ち居振る舞いの一つ一つに、かくか

くしかじかさまざまな解釈を施したのではないでしょうか。本当はどうなのか、それはわかりませんが、コミュニケーションとは互いの解釈の積み重ねだと思えば、オウガさんの絵をめぐって、私はいっぱいオウガさんとコミュニケーションを交わしたと思っています。おもしろかった。